

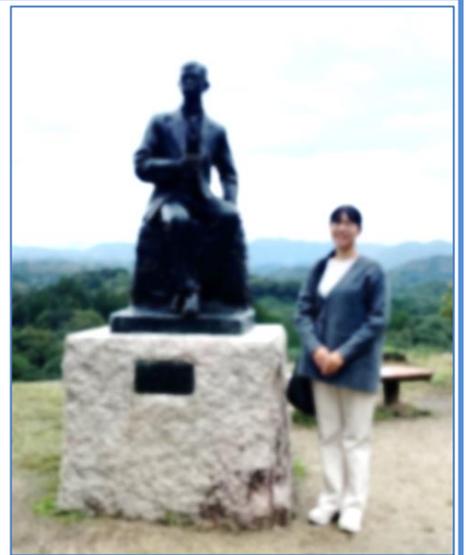
● 「第78回滝廉太郎記念全日本高校声楽コンクール」に参加しました。

「第78回滝廉太郎記念全日本高校声楽コンクール」が10月18～20日に大分県の竹田市で行われ、本校音楽部合唱団のM.Nさん(3年)が仙台市代表として参加して参りました(※10月30日発行「News & Topics」第18号でも河北新報記事とともに紹介しました)。入賞は叶いませんでしたが、Mさんはリハーサルから集中し、本番でも自分の表現したいことをやり切り、素晴らしい歌声を披露してくれました。歌い終えた際の充実した表情が印象的でした。

滝廉太郎の「荒城の月」のお城のイメージは岡城であると言われていきます(作詩の土井晩翠はもちろん青葉城です!)。その岡城跡も見学してきました。結構急な坂がありました。

このほか、竹田市の土居市長に郡仙台市長からのお手紙をお届けしたり、レセプションで他の高校生と交流をしたりと、ハイレベルで誠実な演奏や出会いから、多くの刺激を受けてきました。Mさんは「本当に楽しかった、この経験をこれからは活かしたい」と笑顔で述べておりました。

岡城跡(大分県竹田市)にて滝廉太郎銅像とともに→



● 「第4回国際声楽コンクール東京」のアンサンブル部門本選に参加しました。

8月地区予選、9月の准本選を経て、11月4日(月・祝)東京都の清瀬けやきホールで行われた「第4回国際声楽コンクール東京」のアンサンブル部門の本選に音楽部合唱団の16名が参加してきました。

コンクールでは「惑星」で有名なホルスト作曲の「アヴェ・マリア」をラテン語で歌いました。初めてのラテン語のア・カペラの曲を1ヶ月弱で仕上げ演奏し、第3位を頂くことができました(審査員長が1位の点数をつけてくださいました)。審査員の方々からいただいたご講評や演奏後の振り返りから見えてきた課題を踏まえながら、来月のアンサンブルコンテスト県大会に向けて取り組んでいきたいと思っております。引き続き応援をよろしくお願いいたします。

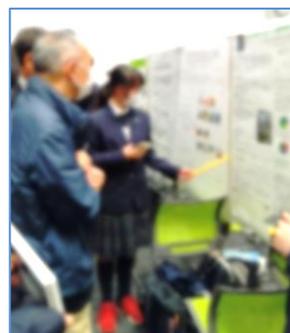
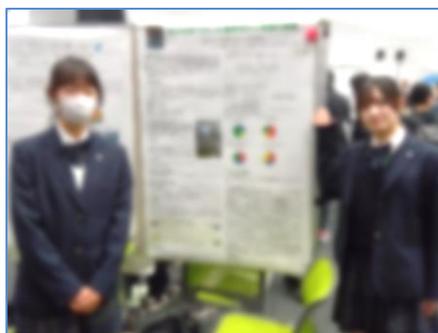
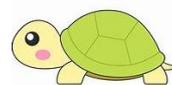


●「生徒理科研究発表会」上位8題に選出!

11月6日(水)東北大学にて開催された「第77回宮城県高等学校生徒理科研究発表会」に、本校自然科学部のT.Sさん(2年)、G.Yさん(1年)が参加し、生物部門で一次審査を突破、44題中、上位8題に選出されました。研究タイトルは「カメのオペラント条件付けと色覚の研究」です。TさんとGさんは、日頃の観察から、本校生物実験室で飼育しているウスグロヨコクビハコガメには高度な学習能力や記憶力があることに気づきました。そこで、静岡県総合学習センターのWEBページの公表されていた静岡聖光学院高等学校のミシシッピーアカミミガメを用いた実験論文(平成16年度「ミシシッピーアカミミガメ」)を参考に、ウスグロヨコクビハコガメのオペラント条件付けと色覚について研究することを思い付きました。実験の結果、このカメが積極的に試行錯誤を行い学習していること、また、色の識別が可能で、色分けした餌入りのスキナーボックスの配置もしくは色を学習していることを突き止めました。実験内容はポスターにまとめ、現在、生物実験室前に掲載しています。

《生徒理科研究発表会について》

- 主催：宮城県高等学校文化連盟自然科学専門部、宮城県高等学校理科研究会
- 共催：東北大学大学院工学研究科 ■後援：宮城県教育委員会、仙台市教育委員会
- 目的：宮城県内高等学校の自然科学系部活動の成果発表の場として、生徒理科研究の普及・発展を図るとともに、生徒相互の部活動に対する理解を深める。自然科学を志す生徒の育成を目指す。



●「Google Workspace 勉強会～Meet 編」を実施しました。情報システム部主催

11月8日(金)放課後、教員対象の標記勉強会を実施しました。はじめに情報システム部部長の太田英樹先生より、今回の勉強会の目的等についてお話をいただいたあと、今年9月より本校で情報ネットワークシステムの支援をしてくださっているNTT東日本宮城エリア統括部サービスセンターの方を講師として、オンライン通信システム「Google Meet」の活用方法について勉強しました。参加した先生方は、講師の説明に従って実際にタブレットで操作してみることができ、また、積極的に質問したり、参加者相互で試行錯誤してみたりと、たいへんアクティブな雰囲気の中で楽しく会を進めることができました。コロナ禍を経て、文部科学省は、災害時の授業確保や多様な児童・生徒への個別対応を実現することなどを目的とし、ICT機器を活用した遠隔・オンライン教育による学習機会の確保を推進しています。Google Meet などを利用したオンラインによる遠隔授業の必要性は、今後ますます高まっていくものと言ってよいでしょう。新しい時代の新しい教育の在り方に対応すべく、本校の先生方も日々研鑽と修養に努めているところです。

